



感染症とたたかう

第25号

2018年
1月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一

お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

● 私たちの暮らしと感染症 ●

海外で流行している感染症を 国内に持ち込まないための準備



海外渡航者、訪日外国人の急増で 病原体の持ち込みのリスクも増加

海外へ出かける人の数は増え続け、2016年には1700万人を超えました。一方、訪日外国人の数も急増しており、2013年に初めて1000万人を突破し、わずか3年後の2016年には倍以上の2400万人に達しました。年間4000万人以上が海外からわが国に入ることによって、感染症が持ち込まれるリスクも高まっています。

海外からわが国に持ち込まれる感染症を「輸入感染症」と呼びます。これは、国内ではほとんど見られない感染症で、旅行者や輸入食品などを通じて国内に持ち込まれた感染症のことを指します。海外で感染した日本人や外国人が国内に

入って発症する例が大半を占めます。

例えば、2014年には東京を中心にデング熱が流行し、162例の感染例が報告されました。これは、デング熱の原因であるデングウイルスに感染した人がわが国で発症し、蚊を媒介して広がったものと推定されています。デングウイルスが存在する熱帯・亜熱帯地域で感染し、持ち込まれたものと思われます。蚊が媒介する輸入感染症には、このほかにマラリアがあります。2000年代初めには年間200例以上ありましたが、最近では年間50例前後まで減少しました。

これ以外に、現地の水や食べ物から感染するものもあります。腸チフス、パラチフス、赤痢、コレラなどです。腸チフス、パラチフスは、サルモネラ菌による感染症で、東南アジア、中南米、アフリカなど各地でまん延しており、流行が繰り返され

ています。年間30例前後の輸入例があります。

2017年秋には、麻疹（はしか）の輸入感染症が発生しました。成田から入国した外国籍の女性が、宮城、青森、群馬、東京、新潟、愛知、奈良、京都、福井と移動する途中で発熱と発疹が出て、富山の医療機関を受診し、麻疹と診断されました。国立感染症研究所では、感染可能期間中（潜伏期間、発症後）に滞在した都府県を中心に、医療機関に注意喚起を行いました。



開発途上国への旅行前には 旅行外来でワクチン接種を

開発途上国でかかるリスクの高い感染症は、旅行者下痢症やA型肝炎など水や食物に関連したものが最も多く、次いでマラリアやデング熱など蚊が媒介する感染症、そしてインフルエンザなどのヒトからヒトに伝播する呼吸器感染症などです。

海外旅行先で何らかの病原体に感染し、帰国して感染症を発症すると、本人が症状で苦しむだけでなく、現地から自宅に至るまでに接した人たちに病気をうつしてしまうリスクもあります。特に、開発途上国に旅行する場合には、近くの渡航外来やトラベルクリニック（長崎大学病院の場合は旅行外来）に相談しましょう。長大病院の旅行外来は、毎週木曜日の午後に診療を行っています。短期・長期に関わらず、海外旅行や海外出張をする人の健康管理を目的とした専門外来で、海外渡航に関連した健康相談、予防接種、マラリア予防内服薬などの処方を行っています。

予防接種するワクチンは、A型肝炎、B型肝炎、破傷風、狂犬病、日本脳炎、混合ワクチン（麻疹・風疹）などです。渡航先によって必要なワクチンの種類が異なるので、医師と相談してください。また、ワクチンは接種して、直ぐに効果を発揮す

るものではありませんし、複数回の接種を要するものもあります。旅行や渡航が決まったら、早めに相談することが重要です。

帰国後に下痢や発熱があれば すぐに医療機関や保健所へ

現地では、生水の飲水は避け、十分に加熱した食べ物をとりましょう。氷、氷入りジュース、カットフルーツ、生野菜にも注意が必要です。蚊に刺されないために、長袖・長ズボンで皮膚を出さないようにし、虫除けスプレーを使用します。

これだけ注意しても、旅行から帰って下痢や発熱などで体調がすぐれない場合があります。風邪や食あたりなどと軽く見ず、医療機関や保健所に相談しましょう。帰国してから5日以内に下痢症状があった場合や、7日以内に発熱やのどの痛みなどの症状があれば、すぐに受診してください。その際、海外に渡航したことを伝えましょう。

現地で体調を崩し、医療機関を受診した際に、医療器具から感染したり、あるいは感染した病原体が薬剤耐性菌だったりすることもあります。楽しい海外旅行ですが、事故や盗難だけでなく感染症のリスクもあることを覚えておきましょう。

次号（2018年2月号）では
「人の役に立つ微生物」を取り上げます。

門司 和彦教授 (熱帯医学・グローバルヘルス研究科)

感染症のリスクを減らす環境づくりを追究

集団全体の健康を考えるエコヘルス 病気だけでなく“健康の原因”を研究

私は、開発途上国の人々が健康に暮らせることを目指して、フィールド研究を続けてきました。住民の健康状態や衛生環境を調査し、その改善のために何が必要なのかを、現地の人たちと一緒に考えてきました。感染症対策もそのなかの重要な項目です。

感染症に限らず、近年の医療では、ある病気についてその原因をみつけること、その原因を取り除くことが重視されています。例えば、結核の原因は結核菌であり、結核菌に感染しないようにすること、感染しても症状が重くならないようにすることが結核への備えです。しかし、高血圧や糖尿病のような生活習慣病（慢性疾患）の原因は一つではありません。食事、運動、喫煙、飲酒、そして家庭環境や社会環境など様々な要因が複雑にからんで病気になることが分かってきました。



ウガンダ北部アチオリランドの村にて。河川盲目症に関連するてんかんに苦しむ子どもや家族を日本の研究者が支援している。

感染症も同じで、多くの先進国では結核菌に感染しても症状が出ない人が多く、結核菌が周囲に広がることもまれです。一方、結核がまん延している開発途上国では、栄養状態や

衛生環境がよくないこと、さらに国力や貧困など社会的な背景も結核を広げる要因になっています。

病気の原因を突き止めるだけでなく、環境や社会構造も含めて“健康で暮らせる要因（原因）”を追究することは、先進国でも開発途上国でも重要です。病気や健康の原因が複雑に関わることで健康問題になり、それがほかの健康問題の原因にもなるというシステムシンキングに基づいた考え方を「エコヘルス」といいます。

先進国では、栄養状態や衛生環境が改善され、必要な医療が受けられる体制が整っています。その結果、高齢者が増加し、医療需要も増えたことで、医療費が増大し、それをどう負担するかという社会的問題になりつつあります。エコヘルスは、そうした問題も含めて国民全体の健康を考えていきます。

様々な分野の研究者と協働して 「顧みられない熱帯病」に向き合う

熱帯医学・グローバルヘルス研究科は、開発途上国で現地の人々と一緒に健康増進に貢献する人材を育成することを目的としています。その国の環境・社会・暮らしと住民の健康を一体としてとらえるエコヘルス研究が重要になります。

健康問題は複雑で、一つの専門分野の研究者だけでは課題を解決できません。例えば私の専門は「人類生態学」という分野です。住民がどうい

う暮らしをしているのかを、食事内容とともに、血液や尿、髪の毛、唾液などからも調べます。さらに、人口構造、世帯構成、平均寿命や死因などを調べ、実態を把握します。

これにより健康問題が明らかになっても、解決方法は得られません。健康を脅かす原因は何か、必要な医療や薬は何か、政治体制や産業の発展など、経済・社会面に問題はないかなど、幅広い分野の研究者と協働して問題解決に取り組む必要があります。

特に、開発途上国の感染症で問題となっている「顧みられない熱帯病」は、貧困が背景となって、それにより病人が増えて地域や国が疲弊し、それがさらなる貧困につながるという悪循環になっています。開発途上国の健康水準を高めることで、感染症も含めた病気になるリスクを減らす活動に、今後も取り組んでいきます。

次号(2018年2月号)では「長崎大学感染症共同研究拠点」を取り上げます。

3月25日に市民公開講座を開催

暮らしの中で、様々な病原体とどう付き合うか

長崎大学では、市民の皆さんに向けた様々なイベントを開催しています。熱帯医学研究所では、感染症をテーマにした市民公開講座を毎年開催してきました。2018年は「様々な病原体とのお付き合い」と題し、私たちの暮らしに影響を及ぼす可能性のある細菌やウイルスについて、わが国のトップレベルの研究者が分かりやすく解説するイベントを3月に行います。入場は無料です。

■日時：2018年3月25日(日)
13時30分～16時(13時開場)

■場所：長崎大学医学部坂本キャンパス
良順会館2階ボードインホール

■講演内容

1. マラリアと戦う
講師：長崎大学教授 金子 修
2. 食中毒をおこす細菌たち
講師：大阪大学教授 飯田 哲也
3. ヒトの免疫から逃れる
厄介なウイルスのお話し
講師：東京大学教授 川口 寧
4. パンデミックインフルエンザ
に対する備えはできた
講師：北海道大学教授 喜田 宏

金子教授は、世界の熱帯・亜熱帯地域で流行しているマラリアの原因であるマラリア原虫が、どういう生物なのかについて長年研究してきました。講演では、マラリア原虫のワクチン開発の現状などについてお話しします。

飯田教授は、腸炎ビブリオなどの細菌がヒトに感染するとなぜ食中毒を引き起こすのか、遺伝子レベルで研究してきました。講演では、食中毒を起こす細菌がどこに潜んでいるのかや、どうやって病気を起こすのかなどについてお話しします。

川口教授は、再発を繰り返すヘルペスウイルスの研究をしています。講演では、ヘルペスウイルスがヒトの免疫から巧みに逃れ、再発を繰り返す仕組みについて最新の研究成果をもとにお話しします。

喜田教授は、ヒトにも動物にも感染する細菌やウイルスの研究に長年にわたり取り組み、特にインフルエンザなどの人獣共通感染症の予防と制圧に貢献してきました。講演では、パンデミックインフルエンザにどう備えるかについてお話しします。

多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

● 問い合わせ先は、熱帯医学研究所 熱研支援課
095-819-7803